

井戸を掘った人を忘れない — 周恩来と日中共同声明 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

一命を賭して北京へ行く。そう覚悟を決めた。日中国交正常化の歴史的な外交交渉に失敗したら首相を辞める。帰国後、田中角栄は「お父さんは剃髪して出家でもしようかなと考えていたんだよ」と娘の真紀子に語っていた。

中国国務院総理の周恩来（1898—1976）も思いは変わらなかった。国内は文化大革命で疲弊し、国外ではソビエト連邦との対立が深まっていた。何としても難局を打開しなければならない。

19歳で日本へ留学し、青春の日々を過ごした。だが日中戦争によって両国の関係は断ち切られた。このままでいいはずがない。「決意さえ堅固であれば希望が実現しないことはない」と改めて自分に言い聴かせる。新たな歴史の扉を開くときがきた。

雨中嵐山を詠んで帰国へ

周恩来は江蘇省淮安府山陽県で生まれた。周家は代々知識人の名家として知られていたものの、父の代に没落したと伝えられている。

天津の南開中学を優秀な成績で卒業したあとロシア革命が起こる1917年に日本へ留学した。大正デモクラシーの時代で中国の留学生が増えていた。東京・神田神保町の東亜高等予備学校などに通学して受験勉強に励む。神保町の小さな愛全公園の一角に「周恩来ここに学ぶ—東亜高等予備学校跡」と記された石碑が建っている。勉学の傍ら友人たちと将来の夢を語りあい、日比谷公園、三越呉服店、浅草界限などを散策した。

官立学校の合格者には中国から学費と生活費が援助されることになっていた。経済的に余裕のない周は官立学校への入学をめざす。

だが現実には甘くなかった。日本語の習得不足によって第一高等学校と東京高等師範学校の受験に失敗する。のちに出版される『十九歳の東京日記』で「友に負け、自分に負け、自暴自棄だ。悲しみに耐えられない」と挫折した苦悩を綴っている。

約1年7カ月の滞在後、母校の南開学校が大学部を創設することを知り、帰国することにした。失意のうちに船の出る神戸へ向かう途中、京都に立ち寄った。マルクス経済学者の河上肇の著書を読んでいた周は京都大学で彼の講義を聴講する。嵐山を訪れたときに詠んだ漢詩「雨中嵐山」の詩碑がのちに日中友好のシンボルとして亀山公園に設けられ、中国人の観光スポットとなっている。

帰国後、南開大学文学部に入学し、反帝国主義を掲げて中国支配に抗議する五・四運動に参加した。周は学生運動のリーダーとして頭角をあらわしていく。フランスに渡って働きながら学ぶ勤工儉学を実践し、毛沢東が率いる中国共産党に入党した。

日本では軍国主義が台頭し、1931年の満州事変



周恩来

を契機として中国へ侵攻した。軍部は中国東北部に満州国を建国し、1937年の盧溝橋事件によって日中戦争に突入する。戦火は中国全土に広がった。

不倒翁として混乱の収束を

日中戦争で中国共産党は蒋介石が率いる国民党と抗日統一戦線＝国共合作を結成し、日本軍と対峙する。その重責を周が担った。太平洋戦争に敗北した日本が1945年に降伏すると国共合作が破綻し、国共内戦が始まる。革命に勝利した中国共産党は1949年、新たに中華人民共和国を樹立した。周は國務院総理に就任し、死去するまで27年間にわたって失脚せず不倒翁と呼ばれた。

日本軍の戦犯で服役期間中に態度が良好な者については早期釈放を許可した。満洲国の皇帝に祀り上げられ戦犯となった清国最後の皇帝・愛新覺羅溥儀に対しても恩赦と仕事が与えられた。

外交部長を兼任した周はインドのネール首相らと協力して1955年、インドネシアでアジア・アフリカの非同盟諸国によるバンドン会議を開き、領土・主権の相互尊重などの平和五原則を提示する。同時に人種差別に反対するアメリカの公民権運動やベトナムの植民地解放闘争を支援した。

1960年代にソビエト連邦との中ソ対立が激化し、国内では文化大革命による混乱が拡大した。毛沢東は青少年による紅衛兵を動員し、走資派＝右派と見做した劉少奇ら党幹部の一掃を目論んだ。周も自己批判を強いられ、紅衛兵の迫害で養女を亡くしている。総理の地位を保ちつつ彼は紅衛兵の暴走を抑えようと奔走した。文化大革命を経験した作家のユン・チアンは毛沢東に追隨した周を批判する一方で「周恩来がいたから中国は完全に崩壊せずに済んだともいえる」と評している。

文化大革命の収束に精魂を傾けるなかで周は1971年、中国の国連加盟に成功し、反対していた日米も中国との国交正常化に動いていく。翌年の2月にアメリカのニクソン大統領が訪中し、関係改善の気運が高まった。しかしニクソンが民主党事務所を盗聴したウォーターゲート事件で交渉は頓挫し、米中国交正常化はカーター民主党政権の1979年まで待たなければならなかった。

現職の総理大臣として初めて田中角栄が1972

年9月に訪中する。反対する声も少なからずあるなかで周と田中は歴史的な会談に臨んでいく。

魂に到達する道理ある闘い

満州に徴兵された田中は戦争の悲惨さを身をもって知っていた。日中戦争による惨害を真摯に謝罪し、周もそれを受け入れた。長時間にわたる交渉の結果、両国は日中共同声明に調印して国交正常化を実現した。日中共同声明で中国政府は両国民の友好のために日本に対する戦争賠償請求を放棄することを宣言する。中国の民衆はこの宣言に必ずしも納得していなかった。だが周は「われわれは日本の軍国主義者と戦争をしていたのだ。日本の人民も、わが国の人民と同じく日本の軍国主義者の犠牲者である」と説得した。共同声明では国連憲章に基づき「両国はアジア太平洋地域で覇権を求めるべきでなく、他のいかなる国による試みにも反対する。すべての紛争を平和的手段によって解決し、武力または武力の威嚇に訴えないことを確認する」という反覇権条項を明記した。

歓迎夕食会で周は新潟出身の田中、香川出身の大平正芳外相、鹿児島出身の二階堂進官房長官のために佐渡おけさ、金比羅船々、おはら節などを軍楽隊に演奏させ、酔った田中の背中を支えた。これに先立ち彼は元全日空社長の岡崎嘉平太らを招いて食事会を開いた。岡崎らは右翼の脅迫に屈せず日中友好の架け橋となってきた。周は中国の格言である飲水思源を引用して「水を飲むときには井戸を掘った人のことを忘れない。両国の井戸を掘ってくれたのがあなた方だ」と語ったという。

長年の激務で彼の身体は癌に蝕まれていった。闘病生活をつづけながら最晩年の1975年、国防・農業・工業・科学技術の「四つの近代化」を提唱し、鄧小平による改革・開放路線の礎を築いた。

病床に臥してもなお執務をやめず翌年に78歳で激動の生涯の幕を閉じる。遺体は妻の鄧穎超との約束で火葬され、遺骨は飛行機から中国の大地に空中散骨された。誰よりも平和を希求していた周恩来は生前「暴力による闘いは肉体にしか及ばない。魂にまで到達することができるのは道理による闘いだけである」と語っていた。魂にふれる革命こそ彼が真底から望んでいたものだった。